

(夏休み雑感) 「働くことしか才能がない」者の一人として

麻生総理が「高齢者は働くことしか才能がない」と発言して、物議をかもした。「高齢者は」などと、一般化してものごとを断定すれば、当然反発を買う。これは、「男は」とか「女は」とか、「黒人は」とか「白人は」とかと、あるカテゴリーを唱えて、十把一絡げにレッテル貼りをすると、今では確実に異議が出るのと同じことである。公職にある人はもちろん、一般の人も注意したほうがよいだろう。

さて、私は古希の年齢なので、れっきとした高齢者であり、多分「働くことしか才能がない」者でもあろう。幸いにも、職業生活の後半に大学教員という比較的高齢まで働ける職場を選んだため、現在も講義を続けさせていただいており、感謝している。

しかし、最近送られて来た高校時代の同期生の会報によると、旧友相寄りゴルフをしたり、スキーをしたり、山歩きをしたり、花見をしたり、ハイキングをしたり、などなど、レジャー活動花盛りである。同期生だから、もちろんほぼ同じ年齢だが、「働くことしか才能がない」高齢者像とは、およそかけ離れているようだ。

同期生と言え、妻もその一人なのだが、彼女は最近仕事を減らして、少しスケジュールに「ゆとり」ができたと言っていたと思ったら、さっそく昔の仲間へ声をかけて旅行をしたり、より近年の友達との余暇活動を活発化させて、相変わらず家にはあまりいない。

うちでは、私自身が若いときから「働くことしか才能がない」点を自覚していたので、家族単位で楽しむというより、妻や子どもには勝手に楽しんでもらうようにしてきた。

だから、子どもが小さいときにも、家族全員で旅行したことは少ないが、妻と子ども 2人の計 3人では、いろんなところへ出かけていた。

それどころか、小学生と中学生だった子ども 2人だけでグアム島の「地球人学校」とやらにも行かせた。自然体験を趣旨に掲げていたと思うが、私としては、そんなことよりも、まだ海外旅行が珍しかった頃なので、パスポートを持って海外に行く経験を子どものうちにさせてやるのも良かろうと思ったのである。

このときの影響かどうかは知らないが、上の息子は長ずると海外旅行が趣味になり、通常の会社員が一週間程度は休みの取れるような時期には例外なく必ず出かける。それもパック旅行などに参加するのではなく、自らプランニングしてオリジナルな旅行をするので、東京海外旅行研究会という同好者団体に長くかかわり、常日頃から情報交換に余念がないのみならず、今では、会の執行部の一員としても忙しくしている。(ちなみに、本サイト掲載の写真に関しては、彼が撮影したものなので、著作権も彼にある。)

下の息子は絵本作家だから、どこまでが働いていて、どこからが働きでないのかよくわからないが、家族の中で「働くことしか才能がない」のは、どうやら私だけのようである。

このホームページに、研究報告等の類ばかりでなく、ときどき、このような雑文もアップして、「働くこと」以外の楽しみの一つにしようと考え、まずは「夏休み雑感」をシリーズで書くことにした。